

民国期の天津における新文学結社とその活動

与小田 隆 一

Associations of Modern Literature and their Activities at Tianjin in the Era of 'Zhonghua Minguo' (Republic of China)

Ryuichi YOKOTA

【要旨】 中華民国期（1912-49）の天津において活動を行った新文学結社のうち、筆者が現時点で把握している44結社について、その活動時期、メンバー、出版刊行物、活動の経緯などのデータをまとめたものである。

【キーワード】 天津 新文学 結社 活動

凡 例

1. ここでは、民国期に天津で活動した新文学結社で、筆者が現時点で把握している48結社のうち、活動時期の判明している44結社を取り上げる。なお、それ以外の4結社については、名称以外のデータが得られていないため、末尾に結社名のみを付記した。
2. 各結社について、下記の5項目のデータを挙げた。但し、情報の多寡により、5項目全てが揃っていないものもある。
 - ① 活動時期
 - ② 主要メンバー
 - ③ 主な出版刊行物及びその刊行期間
 - ④ 活動の経緯
 - ⑤ 備考
3. 各結社の配列は、活動開始の早い順とする。
4. 民国期の天津では、旧体詩詞作者による結社「城南詩社」、「冷楓詞社」や、文言文による「筆記」（随筆）の作者による結社「中国文芸社」など所謂「旧文学」を志向する結社も少なからず存在したが、これらについては、今回は割愛する。

1 微波編訳社

- ① 1922年3月
- ② 趙景深、呂一鳴、孔襄我
- ③ 「微波」不定期刊（1922. 3）
- ⑤ 当時天津の有力紙「益世報」で副刊「新知識」の編集を担当していた天津棉業専門学校（現天津科技大学）の学生趙景深、呂一鳴、孔襄我らによって結成された文芸結社。具体的な活動は「微波」1期を刊行するのみにとどまったようである。

2 孩群社

- ① 1922年10月-12月(?)
- ② 呂一鳴, 趙景深, 焦菊隱
- ③ なし
- ⑤ 元微波編訳社のメンバー呂一鳴, 趙景深, 直隸省立第一中学学生で同校出版部責任者の焦菊隱らにより結成された「会則のない自由団体」。結成後まもなく主宰者の呂一鳴が天津を去り, 北京に赴いたため, 短期間で挫折している⁽¹⁾。微波編訳社とともに次項に挙げる緑波社の原型ともいべき文学結社である。

3 緑波社

- ① 1923年2月-25年夏
- ② 趙景深, 于賽虞, 焦菊隱, 万曼, 孫席珍, 葉碧, 陳勵準
- ③ 「新民意報」副刊「朝霞」(1923. 1.1-7. ?)
同 「詩壇」(1923. 5. 16-10. ?)
同 「小説」(1923. 8.2-8. 23)
同 「緑波旬報」(1923. ?. ?-25. ?. ?)
同 「卿雲」(1923. ?. ?-25. ?. ?)
- ④ 1923年2月12日 成立大会举行, 趙景深を書記, 葉碧を庶務兼会計に選出するとともに, 「春雲」文芸叢書全13種の出版を決定。成立時のメンバー13名(のち60数名に拡大)。
 - 同年6月 第2次大会を举行, 新メンバー9名が加入。
 - 同年7月 緑波社, 詩人徐志摩を講師として南開大学に招聘, 「近代イギリス文学」講義全10回を開講。
 - 同月 趙景深, 「新民意報」副刊「朝霞」の主編を辞し, 湖南省長沙岳雲中学の教員に転ずる。
 - 1924年 趙景深, 田漢, 王魯彦らとともに, 緑波社湖南分社を結成, 会刊「瀟湘緑波」を自費出版。
 - 同年 北京緑波社分社開設, 分社社員10数名⁽²⁾。当地の文芸結社曦社と提携し, 「京報」に文芸副刊「文学週報」を連載(主編・孫席珍)。
 - 1925年夏 「新民意報」停刊, 緑波社活動停止。
- ⑤ 天津で実質的な活動を行った最初の新文学結社。趙景深を始め主要メンバーの多くは, 1921年に北京で結成された文学研究会のメンバーでもあり, 同会の刊行した「小説月報」等にも数多くの作品, 翻訳, 評論を発表している。

4 清農社

- ① 1923年-
- ② 陳勵準
- ③ 「新民意報」副刊「朝霞」(緑波社と共同編集か?)
- ⑤ 同社の主宰者陳勵準は, 同時期に天津で活動していた緑波社の一員でもあり, 清農社メンバーの主要な作品発表の場となった「朝霞」も緑波社の編集によるものである。

ここからもこの両社が密接な関係にあり、清晨社が事実上緑波社の分社的存在であったことが推測できるが、その結成の目的や独自の活動状況については未詳である。

5 文学会

- ① 1923年(?) - 1924年12月
- ② 秉一, 張頁明
- ③ 「文学」半月刊(1923. ? - ? 1924. 5 - 12)
- ④ 1923年 天津南開学校の学生により文学会結成, 会刊「文学」半月刊創刊.
同年 「文学」半月刊6期出版後, 出版形態を旬刊に変更. 2期出版後, 停刊, 文学会も活動停止.
1924年5月 文学会活動再開. 「文学」半月刊復刊.
1925年12月 「文学」半月刊停刊, 文学会活動停止.
- ⑤ 南開学校校内における文芸同好会的組織から発展した新文学結社と思われるが, 詳細は未詳.

6 中州文芸社

- ① 1924年8月 - ?
- ② 未詳
- ③ 「中州文芸」半月刊(1924. 8 - ?)
- ⑤ 同社については, 陳鳴樹・主編「二十世紀中国文学大典 1897-1920」^③の「文壇記事」に「1924年, 『中州文芸』天津で創刊」との記載があるのみで, メンバー, 活動状況については未詳である.

7 玄背社

- ① 1926年春 - 27年1月
- ② 蓬西, 曹禺
- ③ 「庸報」副刊「玄背」(1926. 7. ? - 27. 1. 30)
- ④ 1926年春 天津南開中学学生・蓬西, 曹禺らにより玄背社結成.
同年4月 同人誌「玄背」を自費出版
同年7月 「庸報」に文芸副刊「玄背」(週刊)を創刊.
1927年1月 「玄背」26期で停刊, 玄背社活動停止.
- ⑤ のちに現代中国を代表する劇作家となる曹禺の, 最初期の文芸活動がこの玄背社の活動である. 同社の活動については, 創造社の有力メンバー郁達夫も「文章を何かに利用しようとする考えや, 何か利益を得ようという野心の全くない, 純粹で真摯なもの」と評している^④.

8 天津青年文芸研究学会

- ① 1926年9月 - ?
- ② 楊芸文
- ③ 「文芸之花」月刊(1926. 9)

- ⑤ 同会の編集した「文芸之花」には、「本会は青年の澆刺とした進取の精神をバックボーンとするが、知識の浅さや思想の幼稚さにはなお修正の余地があるため、(文芸創作に関する)研究を旨とする」⁽⁵⁾と記されている。恐らく同会は、文芸を志す青年たちの言わば相互研鑽、習作発表の場として結成されたのであろうが、「文芸之花」は創刊号のみで停刊しており、同会の活動も極めて短期間で挫折したものである。

9 緑夢社

- ① 1926年
 ② 未詳
 ③ 「星夜」(発行形態未詳)(1926. ? - ?)
 ⑤ 同社についても「二十世紀中国文学大典 1897-1920」の「文壇記事」(6 中州文芸社の項参照)に「1926年『星夜』天津で創刊(緑夢社主編)」との記載があるのみで、詳細は未詳。また「星夜」については、「一九一九 - 一九二七年全国雑誌簡目」⁽⁶⁾に「出版地天津、創刊年月不明」として収録されている。

10 天津文芸連合会

- ① 1928年11月 - ?
 ② 未詳(洪波社, 暁光社, 慧光社, 文鈴社など12団体により組織)
 ③ 未詳
 ⑤ 天津で初めて文芸結社間の連携を目指した同会については、1928年11月の「益世報」に第一回準備会を挙行政した旨報道されたが⁽⁷⁾, その後の活動については全く続報がなく、実質的な活動は殆ど行われずに終わった可能性もある。

11 河北文芸社

- ① 1928年12月 - ?
 ② 楊軼倫, 周耘青, 解石田, 牛悟愚
 ③ 未詳
 ⑤ 河北省文芸界の沈滞状況打破と、文学による救国を旨として天津在住の青年により結成された団体。結成時には「益世報」に報道され⁽⁸⁾, また主宰者楊軼倫による結成の経緯を述べた手記⁽⁹⁾も連載されたが、上記の天津文芸連合会と同様、その後の活動については全く報道がなく、他に活動の状況を示すような資料も残っていない。恐らく短期間で活動停止に至ったものと思われる。

12 星星文芸社

- ① 1929年4月 - 5月(?)
 ② 符号, 謝冰瑩, 王亜平, 蔣曉海
 ③ 「星星」半月刊(1929. 4)
 ④ 1929年春 中国共産党党組織が符号, 謝冰瑩夫妻を北方における活動展開のため天津に派遣。
 同年4月 符号, 謝冰瑩夫妻を中心に星星文芸社結成, 「星星」半月刊を創刊す

るも、1期のみで天津市当局により出版停止を命じられる。

- ⑤ 20年代後半から上海を中心に台頭してきた左翼文学（普羅文学）の流れが、天津にまで波及した最初の具体例が、「帝国主義の打倒，支配階級による圧迫と殺戮への反抗，抑圧された大衆の解放運動への支持，利権争奪戦争への反対」をスローガンに掲げる⁽¹⁰⁾同社であった。

13 夜鷹文芸社

- ① 1929年12月－30年初頭（？）
 ② 符号，韓麟符
 ③ 「夜鷹」半月刊（1929. 12）
 ④ 1929年12月 符号，共産党北方党組織責任者・韓麟符とともに夜鷹文芸社を結成，「夜鷹」半月刊を創刊
 1930年初頭 「夜鷹」半月刊，1期のみで天津市当局により出版停止を命じられる。
 ⑤ 夭逝した星星文芸社を実質的に継承する左翼文芸団体で，「無産階級革命文学」のスローガンを初めて明確に提出した⁽¹¹⁾天津の文芸団体でもある。

14 華北無産階級文化同盟

- ① 1930年3月－？
 ② 未詳
 ③ 「前夜」（発行形態未詳）（1930. 3－？）
 ⑤ 同団体については，「天津大辞典」⁽¹²⁾「左翼文学運動在天津」の項に，「夜鷹文芸社を基礎に結成された」との記述があるのみで，メンバー等の詳細については，未詳である。

15 新人社

- ① 1930年12月（？）－？
 ② 曹京平（端木蕻良），徐高源
 ③ 「人間」（発行形態未詳）（1930. 12）
 「新人」（発行形態未詳）（1930. 12）
 ⑤ 前記の玄背社と同様，南開中学の学生によって結成された団体である。

16 四月文芸社

- ① 1932年3月－5月
 ② 万曼，李霽野，戴南冠，田聡，張香山
 ③ 「四月」半月刊（1932. 5）
 ④ 1932年3月 元緑波社メンバーの万曼，南開大学学生李霽野らを中心に四月文芸社結成，「四月」半月刊の4月刊行を目指す。
 同年5月 当初の予定より遅れていた「四月」半月刊の刊行を実現するも，2期を刊行しただけで，天津市当局の取締対象となり挫折。四月文芸社も解散を余儀なくされる。

- ⑤ 天津在住の文学者によって自発的に結成された最初の左翼文学団体である。社名の「四月」は「パリコミューンの成立」(3月18日)と「メーデー」(5月1日)の間の月ということから命名された⁽¹³⁾。

17 天津左翼作家連盟⁽¹⁴⁾

- ① 1932年秋-34年初頭
- ② 潘漠華, 王世鐘, 張秀岩, 吳碩農, 張香山, 曹世瑛, 高文通
- ③ 「噫噫」(発行形態未詳)(1933. 1)
「天津文化」半月刊(1933. 3-10)
- ④ 1931年冬 天津南開学校, 河北省立女子師範学校の学生を中心に「青連読書会」結成, 中国左翼文学, ソ連文学, 日本プロレタリア文学, マルクス主義理論等についての研究活動を行う。
1932年9月 青連読書会メンバー多数が「満州事変」1周年のデモに参加, 天津市国民党政府当局に逮捕される。同読書会はこれにより崩壊。
同年秋 共産党地下組織の外郭団体・天津左翼文化総同盟の指導下に元青連読書会メンバーを中心とする天津左翼作家連盟結成。共産党天津市委員会組織部長の潘漠華がリーダーとなる。
1933年1月 機関誌「噫噫」創刊
同年3月 天津左翼文化総同盟と共同で「天津文化」創刊
同年秋 メンバーの大部分が逮捕, 投獄される
1934年2月 リーダー潘漠華, 「暴動計画」の容疑で国民党特務機関・藍衣社天津市支部により逮捕, 天津左翼作家連盟は完全に崩壊する⁽¹⁵⁾。
- ⑤ 1930年上海で成立した中国左翼作家連盟に呼応する形で結成された共産党指導下の非公開地下組織で, メンバーの大部分は天津在住の青年, 学生であった。「天津文化社」の名義で刊行された「天津文化」以外にも, 一部のメンバーはペンネームを用いて「大公報」副刊「小公園」, 「庸報」副刊「另外一頁」など当時の天津における有力紙の文芸副刊に「反帝抗日」をテーマとした文芸作品を数多く発表している⁽¹⁶⁾。

18 沙漠社

- ① 1932年-33年
- ② 未詳
- ③ 「沙漠」週刊(1932-33)
「駱駝」(発行形態未詳)(1933. 7-?)
- ⑤ 同社については, 「駱駝」創刊の際に「益世報」が記事⁽¹⁷⁾を掲載している。この記事では, 創刊号掲載の小説についてそれぞれ内容が紹介されているが, それを見る限り, 同社は同じ時期に活動した天津左翼作家連盟の影響下に出現したとされる⁽¹⁸⁾小規模左翼文芸団体の一つだったと思われる。

19 北国文芸社

- ① 1933年3月-?

- ② 盧保華
- ③ 「北国文学週報」(1933. 4.1-?)
- ④ 同社に関する資料は、1933年3月、その発足時に「益世報」に掲載された紹介記事⁽¹⁹⁾のみであり、「荒地の如き天津文壇の開拓のため」、天津在住の多くの作家が同社に参加したとされるが、その後の活動に関する報道や資料がなく、実態は不明である。

20 飛流社

- ① 1933年4月-?
- ② 孟英
- ③ 「飛流」月刊(1933. 4-5)
- ⑤ 中国左翼作家連盟の指導の下1932年9月に上海で結成された中国詩歌会に倣い、詩歌を通しての「民族的義憤の表明と日本の中国侵略への抵抗」⁽²⁰⁾を旨とした文学結社である。

21 北枢文芸社

- ① 1933年8月-?
- ② (メンバー約50数名)⁽²¹⁾
- ③ 未詳
- ⑤ 沙漠社と共に下記の天津文芸界連合会を結成していることから、同社も天津左翼作家連盟の影響下にあった左翼文芸団体と思われる。その名は当時の新聞文芸副刊にも散見されるが、具体的な活動に関する資料は見当たらない。

22 天津文芸界連合会

- ① 1933年9月-?
- ② 未詳(沙漠社、北枢文芸社、婦女連合会、水平劇社など8団体により組織)
- ③ 未詳
- ⑤ 天津左翼作家連盟に呼応する形で結成された天津市内の左翼系文芸団体、劇団、婦人団体による連合組織⁽²²⁾であるが、具体的な活動に関する資料がなく、詳細は未詳。

23 寒影文芸社

- ① 1933年11月-?
- ② 未詳
- ③ 「創作与批評」(発行形態未詳)(1933. 11-?)
- ⑤ 「益世報」掲載の評論記事⁽²³⁾に引用された「創作与批評」創刊の辞(「我們的話」)に「文学は如何なる面においても、社会的意義を持つべきである」と述べられていることから、同社が新文学結社であったことは推測できる。ただ、この記事と「創作与批評」創刊時の報道⁽²⁴⁾以外には、同社に関する資料は見当たらず、詳細については未詳である。

24 天下篇社

- ① 1934年2月－4月
- ② 呉雲心, 左小遽, 呉微晒
- ③ 「天下篇」半月刊(1934. 2-3)
- ⑤ 魯迅に倣った時局風刺の雑文を主体とした文芸団体で, 団体名は, 莊子「天下篇」をモチーフとした呉雲心の雑文⁽²⁵⁾からとられたと思われる。同社は魯迅の強い影響下にあり, その活動期間中, 魯迅と頻りに書簡のやりとりを行っている⁽²⁶⁾。

25 三山文芸社

- ① 1934年10月－?
- ② 未詳(天津市内10団体により組織)
- ③ 「北極」旬刊(1934. 10-?)
- ⑤ 前記の天津文芸連合会(10参照)と同様, 「横のつながりがなく分散状態」⁽²⁷⁾にあった天津市内各文芸結社の連携を目的に組織された団体で, 1934年10月から11月頃にかけて「益世報」等の文芸欄にその名が散見される。1935年以降については, その活動を示す資料が全くみられないため, 恐らく数か月で活動を停止したものと思われる。

26 野煙文芸社

- ① 1934年11月－12月
- ② 王銘, 田心, 向宸
- ③ 「野煙」三週刊(1934. 11-12)
- ⑤ 天津在住の青年数名により結成された左翼系文芸結社。同社の結成, 同人誌「野煙」の創刊に際しては, 「益世報」が「天津文壇に彗星が出現する」⁽²⁸⁾と評し, その後も「野煙」の出版ごとにそれに関する報道, 評論⁽²⁹⁾を掲載するなど, 当時の天津においては注目を集める存在であったが, その活動は短期間で挫折している。

27 黒鷹社

- ① 1934年11月－
- ② 王抗菊, 姜賢弼
- ③ 未詳
- ⑤ 1934年11月の「庸報」に同社結成の報道⁽³⁰⁾が見られる。それによれば, 文芸, 詩歌, 絵画, 演劇, 撮影, 音楽の6グループからなる総合芸術団体とされている。ただ, 同社のその後の活動については, 「庸報」のほか, 「益世報」, 「大公報」等の有力紙にも全く報道がなく, 短期間で挫折してしまった可能性が高い。

28 嘘社

- ① 1935年3月－9月
- ② 王余杞
- ③ 「庸報」副刊「嘘」(1935. 3.3-9. 15)
- ⑤ 天津在住の左翼作家王余杞を中心に「嘘声(ブーイング)」を武器とした暗黒との抗

争」⁽³¹⁾を旨として結成された。

29 人生与文学社

- ① 1935年3月－37年4月
- ② 柳無忌，羅皚嵐
- ③ 「人生与文学」月間（のち季刊に変更）（1935. 6－37. 4）
- ④ 1935年3月 南開大学学生を中心に人生与文学社結成
同年4月 「人生与文学」月刊創刊，主編・柳無忌，黄燕生，羅皚嵐，胡立家
1936年 「人生与文学」の発行形態を季刊に変更，主編・柳無忌，石敢当，王慧敏，李田意に交代
1937年4月 「人生与文学」，第2巻第4期を最後に停刊，人生与文学社活動停止。
- ⑤ 同社の二年以上に及ぶ活動期間は，天津の新文学結社としては異例の長さである。但し，同人誌「人生与文学」は度々発行が遅延し，更には月刊が季刊に変更されるなど，その活動は必ずしもコンスタントなものだったとは言い難い。

30 草原詩歌会

- ① 1935年春－37年7月
- ② 周行，田涛，胡奇
- ③ 「詩歌月報」月刊（1935. 5－36. 4）
- ④ 1935年春 草原詩歌会結成，主宰・周行，メンバー田涛，胡奇ら十数名。
同年5月 会刊「詩歌月報」創刊。
1936年4月 「詩歌月報」，第11期を最後に停刊。
同年6月 「天津第一次詩歌座談会」を詩訊社（33参照）と共催，詩歌大衆化の方策について討論。
同年9月 海風詩歌小品社（34参照）設立に際し，主宰・周行を含む草原詩歌会メンバーの大半が同社に合流，これにより草原詩歌会としての独自の活動は実質的に停止。
同年10月 「国防詩歌」を標榜する全国の詩歌団体連合組織「中国詩歌作者協会」に参加。
1937年7月 天津陥落により草原詩歌会完全に崩壊。
- ⑤ 詩歌の大衆化，詩歌を武器とした抗日運動の展開を目的に結成された文芸結社。同人誌「詩歌月報」は，一度の遅延もなく第11期まで刊行されたが，経済的困難のため，停刊⁽³²⁾，その後「草原詩歌会」の名は残したものの，活動はほぼ停止状態となり，事実上海風詩歌小品社に吸収される形となった。

31 田家社

- ① 1936年1月－？
- ② 未詳
- ③ 未詳
- ⑤ 同社については，1935年末の「庸報」に，1936年元旦を期して「停滞状態にある天

津文芸界の開墾」のため活動を開始する旨報道されたが⁽³³⁾、その後の活動については全く情報がない。

32 杭州現代詩草社天津分社

- ① 1936年3月－4月
- ② 邵冠祥
- ③ 「今日詩訊」(未刊行)
- ⑤ 杭州の中学を卒業後、天津の河北省立水産専科学校に在学していた青年詩人邵冠祥を主宰者に結成された新詩団体。杭州本社刊行の「現代詩草」とは別に、天津分社独自の詩歌雑誌「今日詩訊」の刊行を計画⁽³⁴⁾したが、「現代詩草」が創刊号のみで停刊、杭州本社も活動を停止したのに伴い、邵冠祥は新たに次項に挙げる詩訊社を結成した。

33 詩訊社

- ① 1936年4月－7月
- ② 邵冠祥、曹鎮華、張秀亜、黄白瑩、李簡弑
- ③ 「庸報」副刊「詩訊」(1936. 4. 17－7. 10)
- ④ 1936年4月 「庸報」副刊「詩訊」創刊。
同年6月 「天津第一次詩歌座談会」を草原詩歌会(30参照)と共催。
同年7月 新たな文芸刊行物の発刊(次項「詩歌小品」参照)準備のため、「詩訊」第13期を最後に停刊。
- ⑤ 杭州現代詩草社の活動停止後、「詩壇の静寂を打破」⁽³⁵⁾することを目的に邵冠祥ら天津在住の青年詩人10数名により結成された詩歌団体。メンバーは全員がその後次項の海風詩歌小品社に参加している。また、「詩訊」への寄稿者は、メンバー以外にも北平の王亜平、山東の史輪、上海の蒲風など多岐に涉っており、同社が天津の新文学結社としては例外的に、天津以外の文芸結社との連携も含めた非常に活発な活動を行っていたことが窺える。

34 海風(詩歌小品)社⁽³⁶⁾

- ① 1936年9月－37年7月
- ② 邵冠祥、曹鎮華、張秀亜、黄白瑩、李簡弑
- ③ 「詩歌小品」月刊(1936. 10－12)
「海風」月刊(「詩歌小品」より改名)(1937. 1－3)
「詩訊月報」月刊(1936. 12－37. 4)
- ④ 1936年9月 邵冠祥、曹鎮華を代表に海風詩歌小品社発足。発足時のメンバー数約20数名。
同年10月 月刊「詩歌小品」創刊。主編・邵冠祥、徐寿雲、張秀亜、羅詩汀。
同月 中国詩歌作者協会(30 草原詩歌会の項参照)に参加
同年11月 草原詩歌会、青玲芸話団、南開大学学生会等13の文化団体との共催で、「天津文化界追悼魯迅先生逝世大会」を举行。
同年12月 「詩訊月報」創刊。主編・邵冠祥、徐寿雲、張鴻基、李靈。

同月 「海風叢書」第1種として張秀亜の短編小説集「在大龍河畔」を出版。
1937年1月 「詩歌小品」を第4期から「海風」に改名，詩歌，小品文の他，短編小説，報告文学なども掲載の対象とする。これに伴い，団体名を海風社に変更。

同月 「詩訊月報」の主編，張鴻基，魯奮の2名に交代。

同年3月 「海風」第1巻第5・6期合刊号を最後に停刊。

4月 「海風」第2巻を王余杞，甘運衡，徐寿雲の3名を主編として5月1日に刊行予定の旨発表。⁽³⁷⁾（実現せず）

同月 「詩訊月報」，第5期を最後に停刊。

5月 「天津文芸座談会」を主宰，海風社を天津文芸界統一組織の基礎とすることを議決。

同月 「海風叢書」第2種として黄白瑩，李簡戒の小品文集「海河，夜之歌」を出版。

6月 王余杞，万曼，邵冠祥，曹鎮華，張愨言の5名が海風社執行委員に就任。

7月 海風社メンバー邵冠祥，曹鎮華，黄白瑩の3名が中国詩歌作者協会天津分会執行委員に選出される。

同月 「海風叢書」第3種として邵冠祥の詩集「白河」を出版。

同月 中旬，海風社メンバー邵冠祥，曹鎮華，周謙の3名，日本憲兵部隊に連行され，まもなく殺害される。

同月 30日，日本軍の進攻による天津陥落で，海風社は完全に崩壊。

- ⑤ 民国期全体を通じて天津においては最も活発に活動した新文学結社であり，天津のみならず，北平，青島等をも含めた陥落直前期の華北地区全体を代表する新文学結社でもある。約10か月の活動期間中，「益世報」，「庸報」両有力紙に掲載された海風社関連の報道は約90編にもものぼっており，この点においても天津の他の文芸結社を遙かに凌駕している。

35 天津文地社

- ① 1936年11月—37年春
- ② 楊思忠，高文通，李文濤，李文達
- ③ 「文地」月刊（1936. 11—12）
- ⑥ 北平，天津両都市の青年により結成された左翼系文学結社。北平文地社，天津文地社の2社に分かれてそれぞれ活動を行い，天津では元天津左翼作家連盟メンバーの高文通が中心となった⁽³⁸⁾。

36 星火社

- ① 1937年4月—？
- ② 曹鎮華，武孟生，穆毅，張達林，宋際唐，王寅
- ③ 「星火」，「星火詩歌」（いずれも未発刊の可能性大）
- ⑤ 海風社（34参照）代表の曹鎮華を中心に結成された文学結社。「庸報」で同社の結

成、「星火」及び「星火詩歌」の刊行計画に関する報道⁽³⁹⁾がなされたが、その後の活動については全く情報がない。また、2種の雑誌についてもその存在が全く確認できず、未刊行に終わった可能性が高い。

37 激流社

- ① 1937年4月－？
- ② 簡凌，欧陽超，簡翼
- ③ 「文芸画報」（未刊行の可能性大）
- ⑤ 同社については、「文芸画報」の刊行予定が「庸報」で報じられたものの⁽⁴⁰⁾，その後同紙で未だ刊行されていない旨報じられている⁽⁴¹⁾。同社の活動は短期間で挫折し、「文芸画報」も未刊行に終わった可能性が高い。

38 中国詩歌作者協会天津分会

- ① 1937年7月
- ② 邵冠祥，曹鎮華，徐寿雲，黄白瑩，李簡戒，田疇，王雲波
- ③ 「天津詩壇」（1937. 8.1創刊予定，天津陥落のため未刊行）
- ⑤ 「国防詩歌」を標榜する全国の詩歌団体連合組織として1936年10月に発足した中国詩歌作者協会の，北平，蘇州に続く3つ目の地方分会。1937年7月4日に成立大会を開催し，いずれも海風社メンバーの邵冠祥，曹鎮華，黄白瑩を分会執行委員に選出，会刊「天津詩壇」の8月1日刊行を決定⁽⁴²⁾したが，7月30日の天津陥落により崩壊。

39 颯風文芸社

- ① 1943年
- ② 宋泛，毛羽，関傑
- ③ 北京「時言報」副刊「文芸」，同「詩刊」（刊行期間未詳）
- ⑤ 管見の限り，1937年7月－1945年8月の「淪陥期」（事実上の日本軍による占領期）に天津で活動した唯一の新文学結社である。ただ，同社については「中国現代文学社団流派辞典」（注2参照）に簡単な記述がある以外には資料がなく，活動の実態については未詳である。

40 天津文化人連合会

- ① 1945年10月－46年6月
- ② 応授天，王希賢，王琪，黄洪，張拓，呉雲心
- ③ 「文連」週刊（のち半月刊）（1945. 11－46. 4）
- ④ 1945年10月 天津文化人連合会成立大会を開催，参加者約80名，リーダーに応授天を選出，「成立宣言」⁽⁴³⁾を採択。
同月 19日，魯迅の命日に合わせ会刊「文連」を創刊。
46年2月 黄洪を中心とする文化人連合会内魯迅研究グループを基礎に魯迅文芸社成立，「文連」の姉妹誌として「魯迅文芸」を創刊。
4月 応授天，共産党の指示により解放区に異動，王希賢，王琪らが後継者

となる。

6月 「文連」、国民党天津市当局により停刊を命じられ、天津文化人連合会も活動停止。

- ⑤ 中国共産党指導下の抗日統一戦線組織「天津民主革命連盟」を基礎に結成された天津在住の左翼系文化人による統一組織。雑文による国民党批判、魯迅に関する研究活動、詩歌朗読会の開催などを活動の柱とした⁽⁴⁴⁾。

41 魯迅文芸社

- ① 1946年2月－6月
 ② 楊大辛，曹也白，黃洪
 ③ 「魯迅文芸」月刊（1946. 2－6）
 ⑤ 前記の天津文化人連合会魯迅研究グループを中心に結成された文学結社。「魯迅の指し示した道に従って歩む」⁽⁴⁵⁾ことを旨に、「魯迅文芸」月刊を第3期まで刊行したが、1946年6月上記の「文連」ともに国民党天津市当局により停刊を命じられ、同社の活動も停止に追い込まれた。

42 南開大学文芸社

- ① 1947年2月－48年8月
 ② 華遵湯，徐光烈，李志光
 ③ 未詳
 ⑤ 共産党地下党組織の指導下にあった南開大学学生による組織「火社」を基礎に成立した文芸結社。ほぼ同時に成立した下記の南開大学新詩社とともに、詩の朗読会や文芸作品による「反米反蒋介石」運動を展開したが、1948年8月両社メンバーの大半が国民党天津市当局に逮捕されたことにより、活動を停止した⁽⁴⁶⁾。

43 南開大学新詩社

- ① 1947年2月－48年8月
 ② 張懷武，鹿道慈，李国定
 ③ 「詩生活」不定期刊（？－1947. 6）
 ⑤ （上記「南開大学文芸社」の項参照）

44 筆友連合会

- ① 1948年
 ② 毛羽
 ③ 「海河詩刊」（発行形態，発行期間未詳）
 ⑤ 元颯風文芸社（39参照）メンバーの毛羽を中心に結成された文学結社であるが、同会についても「中国現代文学社団流派辞典」（注2参照）に簡単な記述がある以外には資料がなく、活動の実態については未詳である。

なお、下記の4結社については、名称以外の情報が全くないため、最後にその結社名のみを挙げることにする。

- 45 野草文芸社
- 46 野草詩歌会
- 47 草原詩社（詩歌雑誌「草原」刊行）
- 48 津沽文学社

—注—

- (1) 趙景深「關於組織文学社的通訊」「新民意報」副刊「朝霞」1923年1月7日
- (2) このことについては、北京に分社を開設したという説と、天津の本社が北京に移転したという説があり、殷子純「天津緑波社」（『新文学史料』1994年第2期）では前者の説を、範泉主編「中国現代文学社団流派辞典」（上海書店 1993年6月）及び馬良春・李福田総主編「中国文学大辞典」（天津人民出版社 1991年10月）「緑波社」の項では後者の説を採っている。なお主要メンバーであった趙景深の「文壇回憶」（重慶出版社 1985年12月）には、緑波社に関する回想記5篇（『『文学副刊』与『瀟湘緑波』』、「答孫席珍兄談緑波社」、「曦社三友」、「于賽虞」、「焦菊隱」）が収録されているが、いずれも北京分社開設（北京移転）については触れていない。
- (3) 上海教育出版社 1994年12月出版
- (4) 郁達夫「關於編輯介紹以及私事等等」「創造月刊」第1卷第6期 1927年2月1日
- (5) 「本刊發刊啓示」「文芸之花」第1期 1926年9月1日
- (6) 張静廬編「中国現代出版史料 甲」（中華書局 1954年12月）所収
- (7) 「文芸社連合会 日前挙行籌備会」「益世報」副刊「益智粽」1928年11月27日
- (8) 「河北文芸社成立」「益世報」副刊「益智粽」1928年12月11日
- (9) 軼倫「河北文芸社成立始末」「益世報」副刊「益智粽」1928年12月11日—13日連載
- (10) 同人「星星的光芒」「星星」第1期 1929年4月30日
- (11) 蜂子「什麼是時代文芸」「夜鷹」第1期 1929年12月
- (12) 天津社会科学院出版社 2001年3月出版
- (13) 南冠「我們底四月」「四月」第1卷第1期 1932年5月15日
- (14) 天津左翼作家連盟に関しては、元メンバーによる回想記数編がある。但し同連盟は非公開の地下組織であり、機密保持のため個々のメンバーに詳しい情報が知らされなかったようで、その内容には齟齬の生じている点も少なくない。ここでは、主として記述が詳細な次の三編に拠った。
張香山「天津左連的片段回憶」「左連回憶録」下（中国社会科学出版社 1982年5月）所収
曹世瑛「我在參加天津左連」「天津日報」1983年10月9日
高文通「30年代天津左連的成立及其前后的革命活動」劉道華・黄小同主編「中共北方地区党史研究1920—1938」（天津人民出版社 1998年6月）所収
- (15) 「天津大辞典」（注12参照）、「天津文学的歴史回顧」（『天津文化概況』天津社会科学出版社 1990年4月 所収）では、いずれも潘漢華逮捕の時期を1933年末としているが、在天津日本総領事館による資料（外務省警察史5—9 在天津総領事館「昭

和九年天津総領事館警察事務状況)では、1934年2月19日としている。ここでは、具体的日付の記された後者の資料に拠った。

- (16) 例えば「大公報」副刊「小公園」には、1933年の1年間に「反帝、抗日」をテーマとする新詩が約50編掲載されているが、その多くは天津左翼作家連盟メンバーによるものと思われる。
- (17) 「沙漠社『駱駝』出版」「益世報」副刊「別墅」1933年7月24日
- (18) 「左翼文学運動在天津」(「天津大辞典」一注12参照一所収)及び「解放前的天津文学」(「天津通覧」人民日報出版社1988年4月 所収)による。
- (19) 「出版消息 北国文学週報」「益世報」副刊「別墅」1933年3月5日
- (20) 「中国文学家辞典 現代第二分冊」(四川人民出版社 1982年3月)「孟英」の項による
- (21) 「北方左翼文化運動大事記」(「北方左翼文化運動資料匯編」北京出版社 1991年6月 所収)による。
- (22) 「北方左翼文化運動大事記」(注21参照)
- (23) 「本市最近三四月中小刊物春筍怒発」「益世報」副刊「別墅」1933年12月17日
- (24) 「零碎新聞」「益世報」副刊「別墅」1933年11月6日及び22日
- (25) 雲心「『天下篇』今釈」「天下篇」創刊号 1934年2月16日 なお、この文章は事実上の「創刊の辞」として巻頭に掲載されている。
- (26) 「魯迅全集」第15巻(人民文学出版社 1981年)所収の「日記」によれば、魯迅と天下篇社の間では、1934年2月24日から4月4日までの間に4回の書簡のやりとりが行われており、そのうち、3月16日に魯迅が天下篇社に宛てた書簡は、「魯迅全集」第11巻にも収録されている。
- (27) 吳雲心「抗戦前天津文芸界雜憶」中国人民政治協商會議天津市委員会文史資料研究委員会編「天津文史資料選輯第46輯」(天津人民出版社 1989年4月)所収
- (28) 「野煙 文芸刊物近期出版」「益世報」副刊「別墅」1934年10月22日
- (29) 「野煙 創刊号出版」「益世報」副刊「別墅」1934年11月1日
 日木「野煙創刊号読後感」「益世報」副刊「別墅」1934年11月5日
 「野煙 三期出版」「益世報」副刊「別墅」1934年12月17日
- (30) 「庸報」副刊「另外一頁」1934年11月28日
- (31) 王余杞「嘘一発刊詞」「庸報」副刊「嘘」創刊号 1935年3月3日
- (32) 張洛英「天津的詩壇」「庸報」副刊「另外一頁」1937年2月10日
- (33) 「『田家』天津新文学社定於元旦成立」「庸報」副刊「另外一頁」1935年12月31日
- (34) 「芸壇消息」「庸報」副刊「另外一頁」1936年4月1日
- (35) 「写在始刊」「庸報」副刊「詩訊」創刊号 1936年4月17日
- (36) 同社の活動等についての詳細は、拙稿「陥落直前期の天津における海風社の活動」(「九州中国学会報」第41巻 2003年5月)参照。
- (37) 「海風社借地啓事」「益世報」副刊「語林」1937年4月10日
- (38) 「北方左翼文化運動大事記」(注21参照)
- (39) 張羅「天津文壇的展望」「庸報」副刊「新茶経」1937年5月18日
- (40) 李彦文「天津文壇動向」「庸報」副刊「新茶経」1937年4月7日

- (41) 張羅「天津文壇的展望」(注39参照)
- (42) 「益世報」副刊「別墅」1937年7月7日
- (43) 「天津文化人連合会成立宣言」「文連」創刊号 1945年10月19日
- (44) 羅澍偉主編「近代天津城市史」(中国社会科学出版社 1993年7月)による.
- (45) 「編校後記」「魯迅文芸」第1卷第1期 1946年2月25日
- (46) 凌力学, 張搖均「熱血賦詩章—回憶南開大学文芸社和新詩社」「天津文化史料」第5輯(天津市文化局文化史志編修委員会 1996年10月)所収.